

# 指導者の意識に『世界基準』を

## スポーツ研究所シンポジウム 4氏が議論



約700人が来場した会場

世界のトップに立つ選手への育成に何が必要か。専修大学スポーツ研究所(佐竹弘靖所長)の公開シンポジウム「日本基準から世界基準へ」が11月21日、生田キャンパスで行われた。オリンピック候補選手やスポーツの指導者など4人が登壇し、議論を交わ

した。学生ら約700人が熱心に耳を傾けた。登壇者は▽国際卓球連盟副会長・前原正浩氏▽ラグビー・ワールドカップ▽元日本代表・大野均氏▽ビーチバレーボール強化指定選手・石島雄介氏▽ハイパフォーマンススポーツセンター国立スポーツ科学センター長・久木留毅文学部教授。司会

は長野智子文学部特任教授が務めた。張本智和・伊藤美誠両選手ら10代の活躍が目覚ましい昨今の日本卓球界について、前原氏は「1980年代、国内大会で勝つことを目標とする指導法が定着し、指導者の目は世界ではなく、目先の勝ちに走る傾向があった。その意識変革とともに、ジュニア世代の育成へ小学生の研修合宿を実施。世界で勝てるプレースタイル、心構えを持つ選手を育てることに取り組んだ」と長期的な視野で若年層を育成してきた道のりを語った。

スポーツ技術力向上のための研究、支援を目的としたハイパフォーマンススポーツセンターに出向中の久木留毅教授は「20年前までのトレーニング法は、アスリートとコーチの取り組みだったが、今はデータベースの構築やテクノロジ、情報の活用など科学の力が重要だ。トレーニング、栄養、休養などバランスの取れた選手のリズムを作り出すことが必要。キャリア育成、学業のサポートも大切な役割」と、選手を支える同センターの取り組みを紹介した。盛り上がった今年のラ

グビーW杯日本大会。07年から15年までW杯3大会連続で出場した大野氏は、今大会で初の8強入りを果たした日本チームの活躍を分析した。「15年のW杯ロンドン大会で日本は強敵・南アフリカに勝ったが、指導した当時のヘッドコーチの存在が大きい。豊富な練習量とスクラム強化が実を結んだ。それ以降、世界トップ8の全チームと試合を重ねたことも日本大会での快挙につながった」と語る。

バレーボール北京五輪代表で、17年からビーチバレーに転向して東京五輪出場を目指す石島選手は35歳。ビーチバレーのユニホーム姿で登場し会場を沸かせた。「ビーチバレーの年齢層は高い。握ることが良いパフォーマンスにつながる」と、心理状態を数値化して記録するコンディショニングノートを紹介。「心の状態を数値で表すのは難しいが、継続するのは難しい。スキルを向上させることが大切」と、スキルを高めるための六つのポイントを挙げ、「ジェスチャーなど言葉以外の手段は無意識に使われることが多い。意識して使っていけば、間違った伝わり方がなくなる」と話した。

活動の継続には濃密な練習とともに休む勇気も必要。それがパフォーマンスを上げることになる。科学や医学など専門的知識による効果的なリハビリのアドバイスがあれば、自己の力を最大限に引き出せる」と指導者の存在意義を強調。久木留毅教授も「選手を支える側が世界基準の認識を持たないとトップには立てない」と訴えた。

講演を聞いた専大スポーツ編集部八代哲さん(経済3)は「個の力を小さい頃から育成する必要があるという前原さんのお話は、なるほどと思った。ハイパフォーマンススポーツセンターの存在の大きさも感じた。大野・石島選手の諦めない姿勢にも共感した」と話していた。

公開シンポジウムは、スポーツ研究所が08年から実施しており、今回で12回目。



「体のコンディショニングと同様に心のコンディショニングも大切」と話す平田教授

### メンタルトレーニングの重要性説く

スポーツ研 平田教授

スポーツ研究所(佐竹弘靖所長)の平田大輔文部教授が11月27日、川

強化指定選手や日本代表スタッフを対象としたメンタル講習会を開いた。

スポーツ研究所は今年6月、日本バレーボール協会とビーチバレーの普及と競技力向上に関する協定を締結。講習会に先立ち、齋藤美文学部教授がスポーツ研究所の活動を紹介します。「今後もニーズに合わせた協力をしていく。マンパワーやハードを活用してもらいた

いと連携強化を誓った。会場となった川崎マリエンはビーチバレーのナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点施設(NTCC)。この日も強化指定選手向け研修が行われており、日本代表の活動の一環として講習会が実施された。

講師を務めた平田教授は「自分の心理状態を把握することが良いパフォーマンスにつながる」と、心理状態を数値化して記録するコンディショニングノートを紹介。「心の状態を数値で表すのは難しいが、継続するのは難しい。スキルを向上させることが大切」と、スキルを高めるための六つのポイントを挙げ、「ジェスチャーなど言葉以外の手段は無意識に使われることが多い。意識して使っていけば、間違った伝わり方がなくなる」と話した。

### ビーチバレー強化指定選手講習会

講習会ではコンディショニングに大切なコミュニケーションスキルも解説。一試合では視線やジェスチャーといった非言語が重要だが、正確に伝わるには限らない。スキルを向上させることが大切」と、スキルを高めるための六つのポイントを挙げ、「ジェスチャーなど言葉以外の手段は無意識に使われることが多い。意識して使っていけば、間違った伝わり方がなくなる」と話した。



プログラミングに取り組む小学生

情報科学研究所(植竹一)の公開講座「IT×ものづくり入門(文所長)」が11月2日、生田キャンパスで行われた。小学生と保護者ら約20人が参加。デジタル灯ろう作りを通して、コンピュータを使ったものづくりの面白さを体験した。

石井健太郎ネットワーク情報学部准教授の説明を聞いた後、参加者は3色のLED(発光ダイオード)を信号機のように変化させるなど、プログラムミングに取り組んだ。学生、教員のサポートを受けながら製作した。最後は会場の明かりを消して、完成したデジタル灯ろうの瞬きを観賞した。

言葉ではなく、音を聴くという行為から哲学を捉え直す試みの第4弾。民謡歌手の伊藤多喜雄氏を迎え、唄とトークを展開する。

▽日時 12月22日(日) 15時

▽場所 生田キャンパス 2号館アクティブ・スタジオ202

▽司会 伊吹克己文学部教授、金子洋之文学部教授

※入場無料、申し込み不要

要 金子教授Eメール

hkaneko@isc.seishu-u.ac.jp

### 知の発信



人間科学部教授 広瀬 裕子

学校教育や地方の教育行政には基本的に国が介入しないのが望ましいとされていま

破綻した教育行政への政治介入と再生

エクトを進めました。賛否ある政策でしたが、結果的には10年をかけて教育が再生した興味深い事例です。

国家介入と言えは、イギリスでは先行して1994年の性教育義務化政策がありました。性は価値観の領域なので学校は口出しすべきではないというのが原則なのですが、欧州一高い10代の妊娠率やエイズバックを背景に義務化が決まりました。性という個人的価値観の領域が自律性をおぼつかなくしたので、国家が介入してメンテナンスしたようなものだと思います。

性教育義務化が始まった初年度に、ちょうど私は在外研究でイギリスに滞在しており、性教育の授業の参観もできました。それ以来、毎年2回程度イギリスに飛び、現地調査を続けています。現地の情報を自分で実際に見て理解することは何より大切です。学生にもそのことは伝えていて、今まで担当していた教養ゼミや専門ゼミの合宿では、海外で自力で行動して調査することを課しています。自分の力で動き、情報を集めることの大切さと醍醐味を、身をもって学んでほしいと思っています。

(ひろせ・ゆき) 東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学。博士(教育学)。専門は教育行政学、セクシュアリティ。著書に「イギリスの性教育政策史」など。